Interview

トウキョウレザーファクトリー

TOKYO LEATHER FACTORY

加藤 雅信さん
インタビュー

『暮らしに寄り添う「洗える革」でサステナブルに』

皮革は水に濡れてしまうと硬くなるのが残念。急な雨に降られて、バッグなどの革製品の風合いが変わってしまった経験がある方も少なくないのでは？そんな皮革の特性を克服した、ウォッシャブル加工のピッグスキン（豚革）が登場し、ロングヒットしています。開発のきっかけやブランド設立、東京の特産素材である豚革への思いを、トウキョウレザーファクトリー代表、加藤雅信さんにお聞きしました。

加藤：祖父の代から続くタンナー、有限会社ティグレの事業縮小に伴い独立。大学卒業後、家業の革職人として技術継承し、16年間従事しました。革作りで培った技術と経験を基に、豚革が主役になるものづくりを探求しておりました。
革の目利きには自信があり、その魅力を活かす企画は得意でしたので、社会や暮らしにおいて価値がある、作るべきものを作ろうと構想をあたためていました。

——「洗える革」製品が生まれたきっかけは？

加藤：アパレルの取引先さんから水洗いできる革のご要望があり、石居みさお皮革さんのウォッシャブルピッグスエードを提案しておりました。
その案件をきっかけに、水洗いできる機能性は付加価値となることを認識。しかし、業界によって動向が異なり、当時靴・バッグ業界ではウォッシャブル機能への認知がなく、市場にもなかったので開発をしました。
洗濯は暮らしの一部です。誰もが行い、ケアができる革製品で「革との暮らし」が豊かにできれば・・・。

ウォッシャブル 2WAY ショルダーバッグ

——製品化までのご苦労や、革を洗うことで生じる特徴はありますか？

加藤：私は革の職人でしたので、革を洗うテストもかなりやりました。そのなかで一般的な経年変化と異なる変化を発見。デニムのように色が落ち、白っぽく洗いざらしのような風合いに。
そんなプロセスを楽しみ、愛着を感じて長くお使いいただくことは「サステナブル」や「エコ」につながると考えます。

——機能性に優れたハイテクレザーなのにナチュラルでサステナブルという意外性が素敵です。テレビや雑誌などメディアでも多数紹介されていましたね。

加藤：はい。ありがたいことに反響も大きく、東京都墨田区の豚革を使った新たな切り口での革製品として評価を受け、2015年度の「すみだモダン」の認証をいただきました。その後、皮革関連企業が加盟する団体「日本革類卸売事業協同組合」が認定する資格制度「レザーソムリエ」を取得しました。

——製品はものづくりが盛んな墨田区の代表として、ご自身は革のプロフェッショナルとして認められたのですね。革とともに育ち、革を極める加藤さんが感じる、メイドイン東京の豚革の魅力を教えてください。

ウォッシャブルレザーシリーズは洗濯を繰り返すと、
淡く、デニムのように経年変化します。
使うほどに、自分だけの味わいにそだつ革製品です。

TOKYO LEATHER FACTORY

加藤：地域全体がワンチームで豚革の生産に取り組んでいる点です。歴史から見ても豚革に適した設備や機械を持っている事業者が多く、環境が整っています。東京産豚革は、国産豚肉の副産物のみで自給できる、とてもエコな革です。その多種多様な豚革の魅力を活かし未来に向けて、持続可能な「革のある豊かな暮らし」をブランドコンセプトとし多くの方々にご提案していきたいと考えています。

SHOP DATE

TOKYO LEATHER FACTORY
（トウキョウレザーファクトリー）
https://www.tokyoleatherfactory.shop

代表 加藤 雅信
東京都墨田区にあった1948年創業のタンナーより事業を引き継ぐ。
伝統的な皮革製造の技術や経験を基に天然皮革の魅力を探究・提供。

知っているようで知らない革は環境にやさしい素材

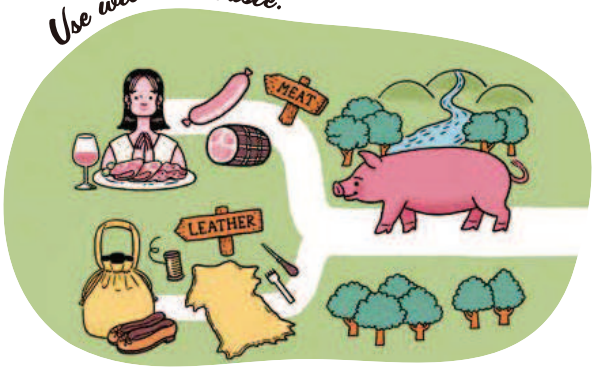
革に対する誤解

皮革・革製品のために
動物を殺しているという誤解

革製品のためだけに、
動物の命をいただくことはありません。

革製品は、食肉用などの動物からお肉をいただくときに出る皮を活用してつくられています。
なので、動物の命を革製品のためだけにいただくということはありません。
食肉文化が続く限り、動物に感謝の想いを込めて、命の一部である皮を無駄なく革製品として活用していく。
これは、ずっと昔から続くエコでサステナブルな活動であり、この先も続けていくことが、私たちの使命であると考えています。

Use without waste.



お肉、革製品、化粧品など、
動物からいただいた命は、余すことなく活用。

家畜として育てられている牛や豚。
その体の大部分は、お肉として私たちの食卓に届けられます。
そして、皮をはじめとした動物のさまざまな部位は、化粧品や医療、油脂、コラーゲン、ゼラチン、肥料など、すべて余すことなく活用されています。

Make full use of it.

Eco and sustainable cycle.

革製品を作るのをやめれば
畜産での温室効果ガスが減るという誤解

革製品を使うと、
脱炭素につながります。

革製品を使うのをやめたとしても、どうぶつからお肉をいただく際に皮は出続けます。
例えば牛の皮。その量はなんと、日本だけでも1年間に約100万頭分(2021年)。
もし活用しないとなると、ハンドバッグにして769万個分、革靴にして2,500万足分の皮を無駄に廃棄・焼却することになり、相当な二酸化炭素が排出されます。
また、これまで革でつくっていた商品を別の素材でつくることになれば、さらなる二酸化炭素の排出につながる可能性すらあります。
皮を、革製品として活用することは、脱炭素につながる、エコでサステナブルなサイクルなんです。

皮革素材より、代替素材のほうが
サステナブルという誤解

革製品は長持ち。
だから地球にやさしい。

安価で見た目がいいモノも増えてきていますが、その中には長持ちしないモノも多く存在します。
短いスパンで買い替えていくと、モノをつくるときと捨てるときに、地球環境への負荷がかかります。
一方で、革製品は丈夫で長持ち。
革は、長い目で見ると、地球にやさしくて、とってもエコな素材なんです。

Use carefully for a long time.

皮革・革製品のサステナビリティを発信していく Thinking Leather Action
一般社団法人 日本皮革産業連合会（JLIA）

皮から革へ

たくさんの工程を経て…
革は生まれる

START

食肉加工所で
肉・皮・脂などと分けられ
それぞれ出荷される

皮

原皮（げんぴ）

原皮は食肉加工所
から、腐らないように
塩漬けにされた状態で
工場に運ばれる。

裏打ち（フレッシング）

皮の裏面に残っている
脂肪などをきれいに取る
とれた脂は捨てずに加工
され使われる。

肉

加工業者や
精肉店へ…

その他

脂・床脂・骨などは
加工されて色々な商品に！

脂

油脂

コラーゲン

化粧品

お薬のカプセル

ゼラチン

豚で使えないのは「鳴き声だけ」と言われる
くらい食肉の副産物は有効活用されているんだ

脱灰・酵解

皮の中の石灰を
薬品で取り除く

分割

皮を一定の
厚さに分割

脱毛・石灰漬け

原皮を石灰液に漬け込む
繊維をほぐして
毛や表面を溶かす

皮から革へ変わる！

なめし

「クロム」や「タンニン」で化学変化を
起こすことで
【皮】から【革】へと生まれ変わる！

タイコ

なめし・脱毛・染色など、革を作る
工程に欠かせない機械。
回転速度や稼働時間は工程に
よって変わってくる。

タイコは用途によって
大きさが違うものを使う

水しぼり

革を絞って
余計な水分を
取り除く。

シェービング

革の肉面を削って
厚さを調整する。

再なめし

硬さや風合いを
調整するため
色々な方法で
更になめす。

夏は気温が高いので
皮が腐りやすい。
早い時間から作業をする

季節によって違う
皮の処理作業

冬は寒さで脂が
固まり、水温も
下がるので脂が
とりにくい

染色・加脂

染色

タイコに革と染料液を
入れて回転させて
染色する。

色を再現する秘密の
調合レシピを各社
持っているんだよ

加脂

革を柔らかくするために脂を
加えていく。革の乾燥も防ぐ。

乾燥

革を伸ばしてシワをとり
縮みを防止する。

ネット張り乾燥

クリップ金具を使って
ネットに張り付けて
平らな状態にして
乾燥させる。

バランス良くクリップを
つけるのが大事！

自然乾燥

天井など風通しの
いい場所に吊るして
乾燥させる。

棒に吊るす時は
生きていた時の
向きに合わせている

塗装

革の表面を好みの色に
塗装する。
色をつける事で表面の
耐久性が高まる。

手塗り

スプレーマシーン

製品

加工された革は
アパレルメーカーや
皮革問屋などに出荷され
さまざまな製品になる

Bag

Wallet

各種加工

ツヤやシボ感を出し豚革の風合いを表現したり、
エンボス・箔フィルム・パンチングなどの加工や
インクジェットプリントなどしてオリジナルの革が
完成する！

普段私たちが目にしている革の
風合いは革のシボ感を出す加工が
施されているんだよ

パンチング

箔・フィルム

インクジェットプリント

エンボス加工

加工の組み合わせで個性
ある革が出来上がるよ

エンボス
＋
箔押し
など

エンボス加工や箔は圧力や熱を
かけることで定着させるよ

エンボス加工の型は
チェック柄・花柄など
工場によって色々な
柄がある。

型

革

計量

革は面積で販売されるため
センサーで表面積を測る。

1デシ

10cm

10cm

ピッグスキンの種類

革の下地×色×仕上げ組み合わせは無限

下地の革

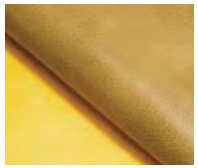
タンニンなめし

植物の樹皮や葉から抽出したタンニンで革を鞣す。張りとコシがあり、型押し形状が保持されやすい。鞣しに時間がかかり高価。

クロムなめし

広く自然界に存在する三価クロムでなめす。ソフトで軽く伸縮性があり、発色がよい。短期間で製造できてコストも優れている。複数の鞣し方をミックスさせることもある。

革に色を付ける



染料染め

透明感のある染料で染色することで革の模様がはっきり浮き出す。

顔料塗装

表面に顔料を吹き付けて均質に色を塗るのでフラットな表情になる。

手捺染（てなせん）

刷毛や筆、スポンジなどを用いて手で色を付けたり模様を描く。

インクジェット

写真やイラストなどを自由にプリントできる。

表面感を加える

エナメル加工

革表面に樹脂を何層も重ねることで、艶と防水性を与える。

フィルム加工・箔加工

柄が描かれたフィルムや箔を熱と圧力で貼り付ける。工場が保有する多種の中から選んで使える。

スエード

革の裏面をサンドペーパーで起毛。ピッグスエードは毛足が長く、繊維が緻密で滑らかさがある。

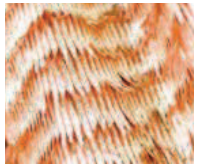
後加工（物理的な加工）

パンチング加工

抜き型を使って、連続した穴を開ける。穴によって柄を表現できる。

エンボス加工（型押し）

彫刻された鉄板を熱と圧力をかけて押し付けることで、立体的な模様を浮き出させる。工場が持つ型の中から選ぶ。



カッティング加工

革を水平に移動させながらナイフのような刃で革に切れ目を入れていく。写真は２方向からカットしたもの。

革の魅力

❶ 天然素材ならではの温かみや表面の美しさ、高級感がある
❷ 動物の動きに対応した皮が原料なので、伸縮性と弾力性がある
❸ 高温でも燃えにくく溶けないことから防炎素材としても使われる
❹ 適度な吸湿性と放湿性があるので靴の内側にも使われている
❺ 使い込むほどに深い艶が生まれ手や体に馴染んでくる

革の種類

鹿（Deer skin）

古来から甲冑など武具に使われてきた。しなやかで手袋や印伝の小物などにも使われる。

豚（Pig skin）

国産で自給できる唯一の素材。原皮やなめし革は世界に輸出されている。タンニンなめし豚革を染色し、表面をこすって艶を出した「アメ豚」は高級素材。

牛革（Cattle hide）

あらゆる皮革の中で最もポピュラーで用途が広い。仔牛は高級な靴や小物に、成牛は大型の鞄やベルト、衣料などに使われる。

馬（Horse Hide）

牛革よりも厚さは薄く、しなやかで柔軟性がある。お尻の部分のコードバンは緻密で独特な光沢があり珍重され、ランドセル用が有名。

サメ（Shark）

網目状の凸凹によって、スジ状の色の濃淡がある。海の生き物なので水に強い。

ワニ（Crocodile）

ワイルドで迫力があり美しく並んだ斑（ふ）を持つ。高級素材。条約で規制されている革もある。

ヘビ（Snake）

個性的な斑紋や鱗が特長、部位で表情が変わる。小ヘビをスネーク、大型をパイソンと呼ぶ。

ピッグスキンの基礎用語

鞣し（なめし）
動物の「皮」に化学処理を施して、腐敗しにくく、耐久性や強度 に優れた「革」を製造すること

デシ（DS）
革を取引する単位で10cm×10cmの大きさ。ピッグスキンは平均120デシほどです。

ぎん面（吟面・銀面）
革の表面となる部分で、独特のシワや凹凸があります。

スエード
革の裏面をサンドペーパーで起毛させたものです。

ヌバック
革のぎん面をサンドペーパーで起毛させたものです。

床（とこ）革
皮を2層に分割したもので、銀面を持たない方を原料にした革。

革は生き物から作られるので個体差があります。

革は元の動物の個体差により大きさや表面感、硬さなどが異なります。

染色は、個体差に加え水温や湿度などの環境でも微妙に変化します。
背中は固く、お腹部分は柔らかいなど同じ素材の中でも物性が異なります。

動物の皮を材料にするため、傷跡などがついている場合があります。